

# 気管支喘息における逆流性食道炎の実態調査

半蔵門病院アレルギー呼吸器内科 灰田美知子

【目的】咳喘息はアトピー咳嗽や逆流性食道炎(GERD)と鑑別を要し、また気管支拡張薬や経口ステロイドは気管支喘息におけるGERDの合併要因となりうる。今回、喘息患者を中心に外来受診患者のGERDの合併の有無を調べたので報告する。

【方法】FSSG(Frequency Scale for the Symptoms of GERD、草野 元康監修)を外来受診順400人に無作為に記入を依頼し不完全記入例を除いた384例を介解析し、F値8点以上をGERDの可能性が高い群と判定した。

【成績】F値8点以上は111人(29%)であり65歳未満、女性群が有意に高値だった。喘息253例の平均値は6.62、8点以上32.4%であった。非喘息131例の平均値は5.08、8点以上22.1%であった。喘息群はF値が有意に高く、特に重症群、ステロイド使用群で高値を示した。テオフィリン、NSAIDsは非使用群でF値が高く、H2RAは使用群で高かったが有意ではなかった。PPI、防御系胃薬、抗鬱薬、抗不安薬は使用群で有意にF値が高かった。

【結論】喘息群では非喘息群よりF値が高いがテオフィリンの関与よりも重症度、ステロイドの使用の有無の影響が大きいと考えられた。PPI、防御系胃薬、抗鬱薬、抗不安薬使用群でもF値は有意に高かった。